

美術による学びについて思うこと ～哲学対話を通して～

美術教育とは直接関係のない立場でありながら、哲学対話をベースとする「子どものための哲学」(philosophy for children=P4C)という教育方法(一般的には「子ども哲学」などと言われる)を普及するための活動を(主に小学校で)している者として、美術教育とP4Cとの親和性を実感しており、その思いを皆さんにご紹介したい。

執筆者の自己紹介

この学び研との関係については、2016年8月28日に行われた第2回哲学プラクティス連絡会のシンポジウム「学校と／で哲学対話」で発表させていただいた後、トークセッション「美術鑑賞と対話」で上野先生のご発表を聴き、そこで初めて「対話による美術鑑賞」ということを教えられました。常々P4Cと美術との間の親和的關係に強い思いを持っていたので、ご講演後に質問をさせていただきました。そこで、先生ご自身が大阪教育大学出身であることも教えていただき、更に本研究会も紹介され、その後、会員登録をさせていただきました。

この連絡会の直後に(9月)に開催された「美術による学び研究会・北海道大会」では、P4Cに関わっている人がシンポジウム「「こどものための哲学」と「対話による美術鑑賞」にゲストとして招かれました。私はこの大会に参加できなかったのですが、その詳細は分かりませんが、学び研としても、P4Cには大いに関心を持たれたということが分ります。

その翌年の2017年2月に大阪の国立国際美術館で実施された大会には、大阪教育大学の卒業生が発表するというので、参加させていただきました。この大会では、三重県立四日市高等学校の森本先生のご発表にいたく感激し、改めて美術とP4Cの親和性を実感しました。

私は大阪教育大学に在職中の2000年に、小学校教員養成課程の新しい専攻を立ち上げることに関わりました。その専攻は小学校における総合的な学習の時間を担う教員を育成することを目的とするということで、「総合認識教育専攻」(略して「小総」と名付けられました。私は元々、倫理学を専攻し、大阪教育大学でも社会科教育講座の中で倫理学を担当していました。いわゆる学校教育とは何の関係もない経歴の持ち主だったのですが、大阪教育大学という教員養成大学に勤めることになり、次第に学校教育への関心が深まってきました。子どもの頃の夢は実は小学校の先生になるというものでしたが、大学卒業後は高校の倫理の教員を目指し、採用試験も受けて、合格もしたのですが、当時は倫理の空席がないということで就職できず、止む無く大学院に進学して、大学に就職したのですが、巡り巡って、自分は小学校の教員にはならなかったものの、その教員養成に関わるようになったというわけです。

大阪教育大学小学校教員養成課程総合認識教育専攻(小総)の紹介

目的：総合的な学習の時間を担う教員の養成

創設：2000年、閉鎖：2010年

組織：教員養成課程各講座の代表者による運営委員会方式(常任委員会と命名)

入学定員：10名

入試形式：面接（20分）（3名）、前期（4名）、後期（5名の集団面接、3名）

教育上の標語：「驚き・発見・創造」

教育上の共通理解：「教えない」（学生の主体的な関りを重視）

その具体的な特色：

- ・ 1月間の遠隔地教育実習
- ・ 2週間の海外教育実習
- ・ 年間を通じての食農教育

参考 野田文子、榊形公也、田中博之「小学校教員養成課程における「総合認識系」の試み」（『教科教育学研究』第19集、日本教育大学協会第二常置委員会編、2001年、99-113頁）

私は常日頃、特に小学校教員養成においては、教科中心ではなく、教科を超えて、あるいは教科の枠を取り払って、児童の関心に即した教育をすべきだという考えを持っていました。制度的にも小学校では基本的に担任がすべての教科を教える以上は、各教科の内容を総合的に捉えて、教科間の連続性を考慮して教育すべきであると考えていました。ところが教員養成にしても、実際の小学校での授業にしても、このようなことは全く考慮されてはいません。つまり、どこまでも教科中心なのです。たまたま附属中学校の校長を拝命して、全国の研修会なるものに参加して、小学校部会を覗いても、全てが教科中心であって、小学校教育を全体として考察するという場はありませんでした。あくまでも「小学校」国語であり、「小学校」理科等々なのです。子どもの関心はむしろ、「教科」という枠を超えているはずですし、特に小学生が感じ、考え、生きている日常は、いわゆる教科とは関係のないものではないでしょうか。特に中学校では教科王国がまかり通り、それぞれの教師は他の教科の内容には全くとっていいほど関心を持っていませんでした。

このようなことを大学で主張していた関係で、大学改革の際に、小総の創設を拝命しました。各講座の代表者の先生方に協力してもらったものの、その運営は本当に大変でした。いずれにせよ、一つの標語を作って、基本的な教育方針としました。それが「驚き・発見・創造」です。

「驚き・発見・創造」の意味するもの、ねらい

- ・ よく観察すること
- ・ 様々な見方・見え方があること
- ・ 先入見に捕らわれないこと
- ・ 自分自身の見方を捉え直すこと
- ・ 新しい創造への意欲を育成すること
- ・ これらの活動を共に創造していくこと
- ・ この創造は、共に活動することによって促され、他者と共有されること

美術との関連で

学生への注意

- ・ 「観察というものは対象を見ると考えられるが、実は観察者を映している」という発想。
- ・ 山本美芽『りんごは赤じゃない』（新潮社、2002年）の読書の推奨。
- ・ 「たび」は「たび」ではない/「コップ」は「コッパ」ではないということ。つまり、
- ・ 見ているものを疑いなさい/自分の都合でものを考えてはいけないということ。

- ・ 物事は「文脈」の中で考え、そこに驚きと発見の喜びがあるということ。

入学試験問題

- ・ 朝日新聞に掲載されている4コマ漫画「ののちゃん」を使い、なぜこの漫画が笑いを誘うのかを書かせ、併せて教育の在り方との関係を論じさせる。
- ・ どの教科でもいいので、自分の選んだ一つの教科のイメージを描き、さらに学校教育全体のイメージを描かせて、その関係を論じさせる。(描く様式は漫画的、イラスト的、図式的、具象的、抽象的、象徴的など自由)。

授業の中で

- ・ 第1期生7名全員にビデオカメラを貸与し、テープは好きなだけ使って、自分の見たものを映像として残すよう指示(これは、年度末に撮った映像を編集して、プレゼンテーションさせるため)。2期生以降はやはり、ビデオカメラを自由に使わせて、それぞれの活動をビデオに撮らせ、発表させた。
- ・ 授業の中で、特別講師として読んだカメラマンが、課題として5分間自己紹介のビデオを作らせた。これは、学生にはかなり困難な課題だったようである。

P4C と美術教育

私がP4Cのことを知ったのは、1990年代の半ばだったと思います。P4Cは、アメリカの哲学者 Mathew Lipman (1922-2010) によって1960年代から開発された学校教育現場における哲学教育プログラムです。彼は、1974年に、ニュージャージー州のモンクレア大学に「子どものための哲学」推進研究所 (Institute for the Advancement of Philosophy for Children (IAPC)) を設立し、P4Cの普及に努めました。その目的は基本的には子どもの3つの思考力、つまり、論理的・批判的思考力/ケア的思考力/創造的思考力を養い、将来、民主主義を支えていく自律的な市民を作るということでした。実際にP4Cを実践していて、確かに論理的・批判的思考力とケア的思考力が発揮されているということは実感できるのですが、創造的思考力の具体的な事例は分りにくい。ところが、P4Cを使った美術の授業を見てみると、子どもたちが、想像力を刺激されて、創造的思考力を発揮しているのを実感できます。

私自身がP4Cという「名前」を知ったばかりで、何をどうするかがまだ全く分かっていなかったとき、初めてP4Cを、中学生5名を相手に実施しました。それは、試験管に水を入れ、そこにスポイトで少しずつ赤インクを垂らしていくという実験めいたものでしたが、問いは、「試験管の水はいつ赤になるのだろうか」というものでした。デモクリトスの原子論に似た考えが出てきたりして、それは結構面白いものでしたが、最後まで付き合ってくれたのは、問いを出して議論するというのを純粋に楽しんでくれた子で、P4Cを何かの役に立てようというつもりで参加してくれた子は途中で興味を失いました。

この時はまだ授業が教科しかなかったために、私のこの最初の試みは放課後に希望者に対して行いました。実際当時は、学校は教科中心であったために、P4Cの実施は学校では不可能だと思っていました。

それが2000年度に「総合的な学習の時間」が創設されるということで、また私が実際、小総の創設にかかわったということで、この時間であれば、可能であろうと考え、小総の中で、P4Cの活動を取り入れました。従って、P4Cを用いた授業も総合学習の一環として実施したわけで、特に美術教育ということを考えてわけではありません。「美術」も一教科であるという受け取り方でした。

総合学習の一環として

オーストラリアのブリスベンにあるビューランダ小学校のヒントン校長の「美しいもの」についての授業（2003年10月22日、大阪市立の小学校5年生を対象）。「美しいもの」とはどういうものかを言うのだろうかという問いを巡って行われた授業。外が真っ黒で中にいろいろ模様が入った漆文箱、逆に外がキラキラして中が真っ黒な箱、色鮮やかなカエルの写真、巨大な茶色のヘビの写真、色鮮やかなマントヒヒの写真、などを見せ、何が美しいものか、なぜそうなのかを議論する。（授業記録：竹内裕美「小学校における「子どものための哲学教育」の可能性」）（『大阪教育大学小学校教員養成課程総合認識教育専攻、平成17年度榊形ゼミ卒業論文文集』2006年、96-101頁）

P4Cによる対話型美術鑑賞授業の展開（総合学習の一環として）

作品鑑賞の実践例

- (1) 金澤正治：「3つの出会いを通して、美を分かち合う喜びを感じる」『兵庫教育 9月号』（No. 739, 兵庫教育委員会、兵庫県立教育研修所、pp. 21-22, 2012）

http://www.hyogo-c.ed.jp/~kenshusho/06hyogokyoiku/hk2012/2012honbun/hk201209_jissen01.pdf

2008年に西宮市の大谷美術館で5年生の総合的な学習の時間で「美術館へいこう」という取り組み。1年間で7回実施。（因みに金澤氏は、私の大阪教育大学での最初のゼミ生で、初期のP4C研究会に参加。）

2011年11月の鑑賞では津高和一の展示を用いて実施。12月に、元永定正の「赤いQ001」を鑑賞。

金澤氏は「対話を通して子どもの中に考えや思いが生まれていると感じる」「一人一人の子どもが、あらたな面をお互いに発見し共感することは、大きな喜びといえる」とコメントし、最後に「絵について教えてもらうのではなくて、作品から受ける自分の感じ方を対等に分かち合う。そこに芸術を楽しむ子どもの姿があった」とまとめています。

- (2) 高橋綾：「見ることを学ぶ、こどもたちに」Communication-Design. 5 P.1-P.19, 2011-09, <https://core.ac.uk/download/pdf/38186200.pdf>

2011年2月に西宮市の大谷美術館で香櫨園小学校5年生を対象にして行われた、元永定正の「赤いQ001」の対話型鑑賞。

高橋氏は、この絵は部屋の中にある鏡にも映っていて、「実物」と「鏡像」に関する印象の違いを論じている、「せんにゆうけかん」が見るのに影響している、友だちの意見を聞いていると、そうとしか見えなくなってくる、というような発言に注目しています。子どもの対話が「絵」そのものから離れていっていく。また、共に鑑賞する楽しさを子どもが発見している。最後には、「見ることは表現することである」、それを高橋氏は子どもたちから学んだと語っています。

P4Cの授業とポスター作成

P4Cの授業のイメージをポスターで表現する活動。

中川雅道「経験の原理とP4Cポスターの変化」『臨床哲学18号』 pp. 43-61, 2016.

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/pdf/vol18.pdf>

図工の授業における P4C による美術鑑賞と制作

(1) 西宮市立甲陽園小学校 5 年図画工作 指導案より

指導者 5 年生担任 桐畑詩織・図工 大島麻子

単元名 鑑賞「美術館で哲学しよう！」

2015 年 12 月 10 日

於西宮市立大谷記念美術館

「松谷武判の流れ MATSUTANI CURRENT」の展示作品の一つである「波動」をクラス全員で鑑賞し、作品を前にして感じた事や疑問をクラスで議論し共有する対話型鑑賞授業。

子どもたちはすでにコミュニティボールを使った P4C の授業を特に国語科で経験しています。

P4C はここでは、「クラス全員が大きき一つの輪をつくり、教師も同じように座る。コミュニティボールが投げられた先を子どもと同じように目で追い、ボールを持つ子どもの意見、子ども達同志の言葉のつむぎ合いをシンプルに聴いていく。子ども達は聞いてくれる仲間がいてくれる安心感を持ち、互いに思考する楽しさを共有できるようになってきている。対話することであらたな自分の考えを発見していく楽しさを知ることができる」とまとめられています。

「美術鑑賞では「感覚的に捉えた驚きや感動を「すごい」の一言で片付けるのではなく、自分が体験した感動はどこからくるものなのかを分析し、思考をまとめる。それぞれの考えを言語としてクラスメイトと交流する中で、他人の感性に触れることによりまた新たな視点や思考と出会い、一つの同じ作品から生まれる自分と他人との「違い」に面白さを感じ取り、互いを認め合う心を養っていきたい」。

松谷武判 作「波動 91-1-8」

http://jmapps.ne.jp/otanimuseum/det.html?data_id=653

実際の授業記録は

<http://p4c-japan.com/wp/wp-content/uploads/2016/03/dialogue-in-museum1.pdf>

また、楕形によるまとめとコメントは

<https://www.facebook.com/groups/341163229937124/permalink/411459866240793/>

を参照。



(2) 同日に行われたもう一つの授業記録は

<http://p4c-japan.com/wp/wp-content/uploads/2016/03/dialogue-in-museum2.pdf>

この授業も大変興味ある展開となっていました。

例えば、「真っ黒な中に立体感がでていて、何か存在を表そうとしている」といった発言、「絵の上部が昨日で、下部は明日」という発言を受けて「唇のように盛り上がっているところは、過去が凝縮されて今があるって感じ」という発言などがありました。これをどう評価するかは大変難しいかもしれませんが、作者の松谷氏は、授業の後のコメントで、「さっきの人も言ったけど、時間を埋め込んでいる」という制作の意図を語っています。

先生は前の授業を受けて「波動」に関してどう思うかを尋ねましたが、もちろん、子どもたちの議論の展開は全く違ったものとなりました。それでも前時と共通の「優しさ」とか「悲しみ」とか「重圧」という言葉が出てきました。

そして、振り返りでは、絵との距離によって見え方が違うので、タイトルは「波動」ではなくて、自分で考えることができるのか、こんなにたくさんの方の見方や感情が出てきて、面白い発見があり、みんな個性的だと思う、個性はつぶさないようにしようと思いました、といった発言がありました。これらの発言も、それぞれの児童の思いが出ていて、クラスでの位置のようなものが想像できます。

松谷武判氏のコメント（柵形によるまとめ）

皆さんが作品を見て、一人ひとりの見方が違っていても、いろいろ感じて、考えて、自分の思いを表現するその在り方は、私が何か新しいものを創作しようとしているときと、全く一緒です。

私の制作の奥には、人間が一人ひとり持っている精神、ものを創作するとか、ものを考えるとか、一番奥のもの、それは口ではなかなか説明できませんが、（松谷氏はこれを後で、「日常の生活のその奥に人間の本当に清らかな純粋な自分」と語っています）それを作ろうとしています。

私は作っているけれど、皆さんは見て、感じてくれている。この見て、感じてくれることの大切さを、私は期待しているから、この絵をここに展示しているのです。私は見て欲しいから、交感して欲しいから、制作しているのです。

皆さんがこの絵を見て、様々な意見を交換してくれたのは、この絵が皆さんを挑発したということ。どのように感じたか、どのような作品を見るかは、それは見る人の自由。どちらがいいとか悪いとかは決められません。

それは歴史が決めてくれると考えるからこそ、私は正しく真剣に作らないといけないのです。

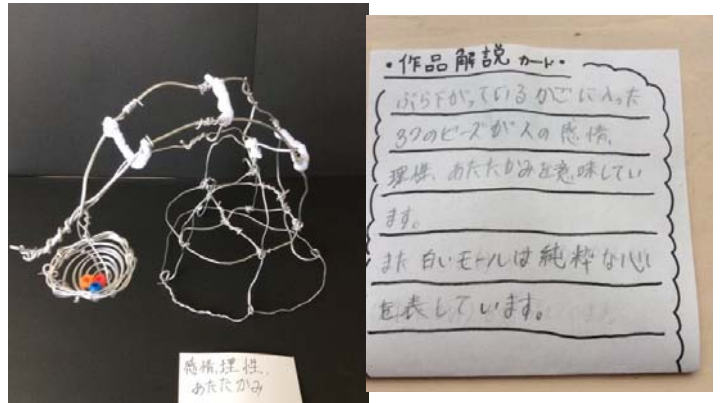
「Wave」というと、色々なイメージがあるけれど、真っ黒に塗っているのは鉛筆、何で鉛筆かといえば、炭の世界が好きで、炭の代わりに鉛筆で、さっきの人も言ったけど、時間を埋め込んでいる、手で書くことの大切さを考えてやっている、その集積みたいなものだということ、それを皆さんが良く分かってくれました。



(3) 針金を用いた制作の授業 (2016年3月)

大島先生は大谷記念美術館でのP4Cによる美術鑑賞に刺激されて、制作にも応用されました。

大島先生は「单元について」「高学年になった子どもたちに新しい材料として針金が手渡される題材である。新しい材料ということ、またその質感や可塑性の高さなどから児童が興味をもつ材料といえる。まずは針金でどのような形をつくることができるか、どのようにすれば立ち上がるか等を色々試すなかで自分のイメージに合う形をそれぞれ



が見つけてほしい。また、ペンチなどの工具を使いながら形を変えていく中で子供たちは各自のイメージを膨らませていく。その中で、線の組み合わせの美しさや全体のフォルムの面白さに着目しながらそのなかで自分にとってよいと思える形や表したいテーマを見つけていけるように指導していく。また、既存の具体的な形だけに捉われるのではなく2月に行った抽象画を見て哲学をする授業を生かして、自分がつくりかえていく中で見つけた形と思考の中のイメージとを結びつけて自分の作品に主題を設定し、小学生にとっての抽象への入り口を体験してほしい」と紹介し、テーマを「ところ」として作品を作ってもらっています。

(4) 「ところ」をテーマにしての制作 (2016年9月)

授業記録は

<https://www.facebook.com/groups/341163229937124/permalink/409307759789337/>

この授業は、図工の先生とそうでないがP4Cの経験の豊富な先生とが協力して行った授業である。「ところ」について対話した後、そのイメージを子どもたちは取りあえず、作品として仕上げ、その後、3つの作品を選んで、その作品に対してP4Cを用いて作品鑑賞を行い、さらにその議論を受けて、再度作品を仕上げていくというものです。

制作→鑑賞→制作(→鑑賞)という過程を経る中で、鑑賞の際の議論は、ある意味、芸術家の制作過程そのものを可視化していると考えられます。

選ばれた作品の一つの「闇」というタイトルの絵を描いた児童が、議論を受けて、自分の作品の意図を語りたいたいというようにいざなわれます。そこには実際の物語がある。クラゲは明るい光をイメージしているが、その光が光の世界から闇の世界に突き落とされた。クラゲは二匹いたけど、一匹になったのは、もう一匹にふられて、明るい星がたくさんあったけれど、それを全部塗りつぶして、闇に包まれている。この作者の意図が、ある意味、議論の過程の中で露わになって来た段階で、語られることによって、子どもたちの大きな共感を生みます。



この授業を記録していた先生は、最後に児童から発言を求められて、子どもたちが自分の経験を語って作品鑑賞をしている姿を見て、「だから人の作品を見て、何か感じたり、話したりするということは、他人のココロについて考えているんだけど、自分のココロについて考えているんじゃないかなー」と意見を述

べられて、子どもたちの拍手を獲得しました。

対話による鑑賞の行方

最初の方で紹介した小総の卒業生は、学生るとき、自分が小総の活動を実践していて、どういうものに成るかが、皆目分からなかった。しかし、その活動を通して、やはり自分が形成されてきたという実感がある。このような生活（という言葉でいいのか）は、何か美術をしている時の感覚と非常に似ていることに気がついてきた、と語っています。

子どもたちが「絵」を見て、対話していくとき、子どもたちは恐らくどこにこの対話が向かっていき、自分がどうなるのだろうかという感覚を感じているのではないのでしょうか。まさに、そのような場で、自分が意味を生成していることに、「絵」を自分のものとしつつあることに、楽しみを感じていくのではないのでしょうか。

最後に個人的な感想

このメールマガジンへの投稿の機会を与えられ、子どもの哲学的対話による鑑賞や制作を分析する過程で、非常に強く思ったことは、自分が今まで、いわゆる専門的に研究してきたケルケゴールというデンマークの思想家をどう解釈するかということに対する課題を、改めて考え直す、あるいは考え続けるという動機を与えられたことです。

ケルケゴールは、様々な仮名のもとに著作をあらわし、一方で本名でも著作を残しています。そして、特に仮名で書かれた著作に関しては、これらはケルケゴール自身が書いたものであるという仕方で読んで欲しくない、著作を著作そのものとして読者が自分の力で呼んで欲しいと語っています。

彼は、テキストの解釈は一つの決断であり、読者が自分のものとするものであるということを強調し、「書評」は知識を与えるものであり、テキストに価値を与える一種の試験の成績のようなものであり、読者はそれを読んでテキストを理解したと思ってはいけない、テキストの内容は読者自らが自分のものとしなければいけない、とも語っています。

しかし、一方で、ケルケゴールはこれらの仮名著作がすべて自分の書いたものであり、「著作家活動の視点」なるものも提供している。つまりどう読んで欲しいかの意図もまた示しているのです。このような矛盾をケルケゴール研究者はどう考えるのかという課題が常に突き付けられてきたわけです。

謝辞

この投稿の執筆にあたっては、特に東京都品川区立の小学校教諭大畠麻子先生、西宮市立の小学校教諭桐畑詩織先生、西宮市立の小学校教諭金澤正治先生に感謝申し上げます。また、西宮市立大谷記念美術館には松谷武判氏の作品へのリンクの許可を与えていただいたことに、さらに、間接的にはなりますが、作品への引用とコメントのまとめに関しましては、松谷武判先生に感謝申し上げます。

大阪教育大学名誉教授
武庫川女子大学名誉教授
榊形公也（ますがたきんや
）

「美術による学び研究会メールマガジン」第282号に掲載。



上野行一先生の感想

一文一文、頷きながら読ませていただきました。

対話による鑑賞と哲学対話との親和性はそのとおりだと思いますし、対話による鑑賞の行為そのものが哲学の実践のような気がします。

『闇』を描いた子供の話はアフラ・マズダとアーリマンの話のようで、ドキリとしました。

人の作品を見て、何か感じたり、話したりするということは、他人のココロについて考えているんだけど、自分のココロについて考えているんじゃないかな

ほんとにそのとおりだと思います。

解のない問いを考えることが哲学だとすれば、解のない問いの最たるものは自分の心でしょう。